

サニヤイサリ 50、6、13(日)

ブロンベン、サイゴンの陥落というアジア情勢の新たな流動のなかで、朝鮮半島の緊張がとみに高まり、次は朝鮮半島だ、といった見方が、わが国のマスコミやジャーナリズムを賑わせている。悪名高い

ドミノ理論を、この期におよんで護持しようというの

直言

だろっか。

直

だが、このよう
なセンセーシヨナ
リズムにもかかわ

らず、われわれとしては、あくまでも地域研究的な視野に立つて、事態を冷静に見つめてゆかねばなるまい。

私は今月初め、東南アジアからの帰途韓国に立ち寄り、板門

店の非武装地帯をも訪れて、その日のうちに帰国したが、三十八度線がわが国にとつてこんなにも近い距離にあることの意味を改めて認識するとともに、板門店の田園風景があまりにも長閑かで、数羽の白鷺が南と北の

次は朝鮮半島か？

なか
じま
みね
お
中 嶋 嶺 雄

あいたを静かに飛翔している様子か、かえって問題の根深さを訴えているかのようなであった。民族分断の悲劇を体験したこのない平和国家日本のわれわれが、北からの脅威の有無についてとやかかいたところで、

それは結局、一種の評論でしかなくともいえようが、しかし、わが国の安全にとつても重要な今日の朝鮮半島の情勢を冷静に分析してみると、やはり事態はインドシナ半島と大きく異なっていることを認めざるを得ない

い。第一に、かつての朝鮮戦争の経緯とその衝撃的な悲劇は、アジアの三十年戦争といわれる持久戦的なベトナム戦争と本質的に異なるという経験に加えて、韓国と南ベトナムとの軍事的差も大きい。

(東京外大助教授)